ウィーノックパンデミック

愛根

目次

ウィーノックパンデミック 1

ウィーノックパンデミック

★ウィーノックパンデミック★

世の中には陰謀が満ち溢れていた。

中央銀行は私立銀行で誰も止められなかった。

テレビ・マスコミもきっちり抑えられていた。

人々は事実を知らなすぎたんだ。

福音に目覚めるのが遅すぎたんだ。

なぜ戦争が起こるのか。

なぜ病気が絶えないのか。

なぜ貧困がなくならないのか。

それは” 陰謀” によるところが大きいのです。

「ふぁ～あ、よく寝たぁ」

白銀の髪の美少女は大きく息を吐き、
目を覚ましていく。

「まずは顔を洗わなくっちゃね！！」

少女は顔を洗いに行った。

そして、朝食を作りだした。

「今日もいつも通り、パンにクリームチーズを塗って、
ジャムを塗って食べるのですぅ。おいしいのですぅ」

コーヒーにはエリスリトールを入れ、
糖分を控え、健康的にしていく。

「はぁ、幸せですぅ。うれしいですぅ。
主よ、感謝するのですぅ」

少女は立派なクリスチャンであった。

そして、今は――

「姫、お祈りの時間ですよ。朝の祈りは一日を豊かにします。
姫として当然すべきことですよ、分かったわね！！」

側近のあかね嬢が声をかけた。

「ああ、うん、分かってるって！！
民のためにお祈りしなくちゃね！！
でもね、律法的になっちゃダメだよ。」

少女は世界の姫として君臨していた。

それはもうとても可愛らしく。

「愛根姫、祈りの間へ行きましょう。
主が答えてくださいますよ？」

「主は優しいのですぅ。私になんでもくれるんですぅ。
私は幸せなんですぅ。うれしいんですぅ。」

愛根姫は可愛らしく祈りの間へ行った。

そして、一人になり、部屋を暗くし、
ろうそくをともし、
膝をかがめ、両手を天に差し伸べて
祈った。

「愛する天のお父様。
今日もあなたの御名をあがめられる幸せを感謝します。
私はとても幸せです。
今日一日の糧を私にお与えください。
民が今日も守られ、幸せでありますように。
エトセトラ。」

そして、

「愛する主イエス・キリストの御名によって祈ります。
アーメン」

10 分の祈りは終わった。

愛根の心は晴れやかだった。

愛根姫は精神障害者だった。

愛根姫は多剤大量され、薬と戦っていた。

しかし、戦うのをやめ、減らした薬を戻した時、
愛根姫はとっても幸せになった。

そして、薬が大好きになった。

聖書の次に抗精神薬が好きってぐらい好きになってしまった。

なので、今でも抗精神薬を飲んでいる。

「はぁ、これから何しようかなぁ。」

清らかすぎる愛根姫は国から面倒を見てもらい、
好き勝手して暮らしている。

「よし、福音のためにディスガイアをして遊ぼう！！
これはきっと福音のためになるに違いない。
レベルを上げてみんなに自慢しよう！！
きっと福音のためになるに違いない。」

愛根姫はディスガイアをして、遊ぶことにした。

今、レベル３２００。非常に強くなっていた。

「次はビューティーキャッスルかぁ。
ボスがレベル 2500 もあるからなぁ。
プリエ（2000）も強かったから、強いんだろうなぁ...」

愛根姫はディスガイアを 1 時間やった。

そして、パスタを食べ、
昼薬の時間になった。

「待ちに待った昼薬の時間...じゅるり」

「姫、昼薬 3 錠です。どうぞ」

「ありがとう、あかね。私、飲むね！！」

愛根は薬をおいしそうに飲んだ。

「はぁ、おいしい！　薬おいしい！！」

愛根はとても喜んだ。

「1 時間で効いてきますね。よかったですね。」

「はぁ、うれしい。よかったですぅ」

愛根姫は全然姫らしくなかった。

愛根姫が姫になったのは愛寝が愛根訳聖書を書いたからだ。

飛ぶように売れて、愛根は有名になった。

そして、あまりにも可愛すぎるので、
愛根は姫として祭り上げられた。

そう言ういきさつなのだ。

「ほんとに愛根姫は可愛らしいですね」

「えへへ、そんなことないって！！
ただ、自分の力をそぎ落として、
主を信頼してるだけだって！！」

「今日は民の間に顔を出す予定がありましたね。
そろそろ行きましょうか。」

「うん！　行こう！！」

愛根姫は街宣車に乗り大通りに出た。

愛根姫は手を振りながら、
静かに祈っていた。

イエス様、来てくださいと。

愛根の願いはなぜか聞かれた。

しかし、この時の愛根はそんなこと知る由もなかった――

夕方のニュースで――

「アフリカで人を幼児化させる昆虫が
大量発生しています。
名前はウィーノック（最終審判）
と名付けられ、猛威を振るっています。
アフリカでは人口の３分の１が幼児化。
体も心ももう幼児です。
みんな困っています。
この混乱は世界に波及するもようで・・・」

「ウィーノック？
なにそれ？」

「人が子供になっちゃうんですって。
困りましたね、姫。」

「じゃあ、今のうちにおいしいものを食べよう！！
今日はすき焼き！ すき焼きがいい！！
お願いあかね？？」

「いいですよ。国産黒毛和牛ですよ。
おいしいですよぉ。」

「和牛！？　黒毛和牛！？　ああ、おいしそう。
主よ、感謝しますぅ。」

愛根姫はご満悦であった。

ところ変わって、ここはイギリスロンドン。

霧の町であった。

「ジェリック、今日のご飯、何にする？」

「エスカルゴがいいな。おいしいのが食べたい。」

「じゃあそうしましょう。とびっきりおいしいのをね！！」

ジェリックとアリスは恋人同士であった。

そして、夕方のニュースでウィーノックのことを
知った。

「ウィーノック・・・これはやばいはね。
対策を練らないと。」

「どんな？」

「まず、食料ね。パスタは長持ちするからたくさん
買っておきましょう。そしてミネラルウォーター。
これは必須よ。」

「分かったよ、アリス。ほんとに頼もしいなぁ。」

「そして、私は超強力な虫よけ殺虫剤を
ケムトレイルとして散布する計画を始動するわ！！
これでイギリスは安全になるでしょう。」

「なんと！　素晴らしいではないか！！
流石私のアリス。素晴らしいよ」

「よし！ 私は研究所へ。あなたは食料をかたっぱしから買って来て、
部屋にため込むのよ！！　分かったわね！？」

「ＯＫ、愛しのモナムール。そうしておくよ。」

アリスは科学者であった。ジェリックは警察官であった。

二人ともクリスチャンで、信仰が深かった。

アリスは研究所へ着いた。

人体に影響の少ないけど、きわめて毒性の強い物質を
考えまくった。

時間はあまりない。

「やっぱり、一酸化炭素と硫酸を化合すれば
強力な物質ができると思う。それを殺虫剤と
虫よけスプレーの中身と合わせて、
ああ、そうだ、フッ素も化合しよう。
これで、フフフフ.....」

アリスの研究は難航した。

これでは強すぎると思った。

「あきらめちゃダメよ、アリス。
時間がないんだから。
ここは愛情、愛情だわ、アリス.....」

そして、ニトログリセリンを混ぜ、
祈りを込めた。

「ああ、主よ、どうかこの研究がうまく行きますように。
イギリスが、そして世界がどうか
この災厄から守られ、安全に暮らせますように。
お祈りいたします。アーメン。」

そして、研究は完成した。

これを空気中で爆発させ、ウィーノックを
撃退するのだ！！

「ファ～ッハッハッハ！！！
見たか、私の力！　　これが私の力なのだよ！！
私の頭脳のね！！」

アリスは非常に優秀なパーフェクツな科学者だった。

アリスは家に帰った。

「ああ、アリスおかえり。買って来たよ。」

そこには山積みのパスタとニンニク油と
ミネラルウォーターが。

「君への愛ゆえだよ。愛してるよ、アリス。」

「ジェリック.....！！」

二人は抱擁し合った。

そして、残り少ない時を過ごすため、
夜、二人は愛し合ったのだった。

そして――

翌々日。アリスの研究はイギリス議会に認められ、

承認されることになった。

ウィーノックはもうギリシャまで来ていた。

直ちに防虫剤・アリスパワーはケムトレイルとして
飛行機から散布された。

人々は建物に避難した。

そして、翌日――

ウィーノックはついにイギリスに来た。

ウィーノックはアリスパワーによって
確実に弱っていった。

しかし、ガラスの弱い窓は食い破り、
中にいる人を襲った。

かまれた人は確実に幼児になっていった。

アリスのマンションは防弾ガラスであった。

「流石にウィーノックも来れないみたいね。」

「ほとぼりが冷めるまでここにいよう、アリス」

「ええ、そうしましょう。」

そして 3 日が経った.....

ニュースではイギリス国民の 2 割が幼児化したらしかった。

ケムトレイルはもうできなくなっていた。

「あーあ、ウィーノックほんと強い。
何なのこの虫、信じらんない！！」

「きっと神様の使いなんだよ。」

「え？」

「きっと神様の御心なんだよ。
意味があるんだよ、きっと」

「そうなのかなぁ.....」

アリスは御言葉を思いめぐらした。

「あなたがたの中で一番偉い人は子供のようでありなさいかぁ・・・」

「天国への道なのかもしれないなぁ。」

アリスはよく考えた。

「ジェリック、かまれに行こ。」

「え？」

「何か、このままでいちゃまずい気がするんだ.....。」

ジェリックも考えて、

「このまま立てこもるのも御心に反してるかもな。
よし、かまれよう。」

二人は一緒に窓に向かい、窓を開けた。

1 匹のウィーノックが入って来た。

二人はかまれた。

そして——

「あ、あ、ああ———」

二人はどんどん縮んでいく。

子供になっていった。

過去のジェリックとの思い出が走馬灯のようによみがえる。

二人は完全に子供になった。

淡い愛の記憶はおぼろげで思いだせない。

ただ、主への信仰だけは残っていた。

「信仰・希望・愛、この３つはいつまでも残ります。
その中で一番偉大なものは愛です。」

二人は幸せだった。

「愛根姫！　どこに行くのですか！！
外は危ないですよ！！」

「何かね、もう終末だと思うんだ。
私、ウィーノックにかまれたい。
それだけなんだ.....」

「まったく、愛根姫は.....。
私もお供しますよ。」

二人は３日後、ウィーノックにかまれた。

世界の半分はウィーノックにかまれた。

かまれなかった人もいるが、半数であった。

そして――

子供化した人の背中に羽が生えた。

天使化したのだ。

愛根姫も天使化した。

天は開け、イエス様と先に死んだ人たちが来た。

そして、お互いはまみえ、天に引き上げられた。

みんな主を賛美していた。

残った地上は――

これから辛く長い、黙示録の時代が来るのであった――

天にて、愛根姫はいつものように主を賛美して
幸せだった。

あかねもそばにいたけど、何でそばにいるのかは
思い出せない。

アリスとジェリックも主を賛美して幸せだった。

もう、お互いの関係を思い出さない。

ただ、主にだけ賛美を捧げ、幸せであった。

天国はそういうところだと思うのです。

アーメン。

ＥＮＤ

あとがき

前半ろくでもないけど、何でこんな深い小説に！？
ああ、これも主とチェーン式バイブルのおかげ（えへへ）
買っちゃったんだから許してお願い！！

これも夢をヒントに書いたんですよ。
夢にウィーノックが出てきた。
感謝します。
主よ、賛美します。

アーメン。

愛根☆

可愛い愛根ブログ♪
https://ameblo.jp/lapis-2019/

愛根 HP
https://aineshinestar.wixsite.com/yorokobi

★ウィーノックパンデミック★

著　　愛根

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社